

## 木喰行道の自刻像

山 本 裕 子

はじめに

木喰行道は、一七一八年（享保三）に生まれ、一八一〇年（文化七）に没し、生涯の間に僧名を行道から、五行、明満とかえ、全国各地を歩き加持祈禱を行いながら作仏を行った遊行僧である。大正時代、柳宗悦が見出し研究したことで知られる。<sup>(1)</sup>普通、「モクジキ」と言った場合には肉類、五穀を食わず、木の実や草などを食する修行形態を指し、その修行を行う僧を木食上人と呼ぶが、木喰行道の場合、木食の「食」の字を途中から口偏のついた「喰」に変え自ら固有名詞化して使用しているため、現在でも単に「木喰」の名で呼ばれる。以下本論でもこの「木喰」を使用していくこととする。

この木喰は千体仏を彫ることを本願とし、<sup>(2)</sup>現在六百余りの仏像が現存している。その中には自分自身の姿を彫った像があり、それらは「自刻像」と呼ばれる。

「自刻像」については日本彫刻史において未だその研究はないようである。『日本美術史事典』（平凡社、一九八七）には、「自画像」の項の一部に前川誠郎氏による「自刻像」の解説があり、それは以下の通りである。

彫刻または絵画（素描、版画を含む）による美術家の自己表現で、肖像芸術の特異かつ重要な位置部門をなす。美術家にとって自身の容姿はもつとも身近な描写対象であるため、自画像または自刻像は美術とともにつねに存在するともいえる。

「美術家」とあることからこれは近代以降の美術を指しているようにも思われるが、日本において自刻像の制作がいつから始まったか定かではない。江戸時代には、木喰以外に、浄土宗捨世派の僧木食弾誓（一五五一―一六二三）と、浄真寺（東京世田谷区）の開山珂碩上人（一六一八―一六九四）が自刻像を制作した、という記録がある。しかし、その記録に該当するとされる像については、自刻像ではないと指摘がされている。<sup>(3)</sup>その他にも、円空（一六三二―一六九五）、清水降慶（一六五九―一七三三）、松雲元慶（一六四八―一七一〇）、白隠（一六八五―一七六八）の自刻像として伝わる像があるが、それらは明らかに自刻像ではないものや、自刻像であるか不確かなものである。<sup>(4)</sup>

したがって、木喰の像は現存する確実な自刻像として大変興味深いものである。

本稿では自刻像を制作したことが明らかである木喰の像を取り上げ、それらの像について再確認を行うと同時に、像に記される背銘語句の意味するところを考察したい。

顎 鬚	耳	衣	手	持 物	姿形	足	光背（頭光）	台 座
小	小さめ	通肩	衣中手	なし	坐像	—	なし	荷葉座 *1
中 先が細い	中	通肩	胸前で衣中手	なし	倚像	裸足	なし	山型
大 先が細い	大	偏袒右肩	左は袋を持つ	左・袋, 右・ 掌に何かを 持つ*2	立像	裸足	なし	山型
中 先が細い	—	上半身露出 *3	胸前で衣中手	なし	立像	裸足	なし	蓮華座
大	大	通肩	腹前で衣中手	数珠	坐像	—	なし	特殊型 (幅小)※
大	大	偏袒右肩	胸前で衣中手	数珠	坐像	—	なし	高い岩座
大	中	通肩	腹前で衣中手	なし	坐像	—	あり(小さめ) 前面外周に光明真言	特殊型
大	大	通肩	胸前で衣中手	不明	坐像	—	あり 表面が磨耗する	特殊型
大	大	通肩	胸前で衣中手	数珠	坐像	—	なし	特殊型
多量	大	偏袒右肩	腹前で衣中手	なし	坐像	—	なし	なし
大、長い	大	偏袒右肩	腹前で衣中手	数珠	坐像	—	あり 前面外周に光明真言	特殊型
大、長い	大	上半身露出	右手で左の 衣先を持つ	なし	倚像	靴を 履く	あり 前面外周に光明真言	山型
大	大	通肩	腹前で衣中手	なし	倚像	裸足	あり 前面外周に光明真言	山型
大	大	通肩	腹前で衣中手	なし	倚像	裸足	あり 表面が磨耗する	山型
大、長い	大	通肩	腹前で衣中手	数珠	倚像	裸足	あり 前面外周に光明真言	特殊型
大、長い	大	通肩	腹前で衣中手	数珠	倚像	裸足	あり 前面外周に光明真言	特殊型
大、長い	大	通肩	腹前で衣中手	数珠	倚像	裸足	あり 前面外周に光明真言	特殊型

※特殊型…六角形に斜線の文

\*1 柳宗悦『柳宗悦全集』第七巻の記述を参照。

\*2, 3 孤杉彩「木喰の自身像」の記述を参照。

(表1) 【自刻像像容特徴】

	所 蔵・所 在	制 作 年	頭 部	表情	額のしわ
①	焼失 元・九品堂(新潟県両津市平沢町)	1785(天明5)3.15	丸い	目を閉じる	不明
②	妙相寺(長崎市本河内町)	推定 1795(寛政7)~96(寛政8)	丸い	少々笑う	不明
③	西都市立歴史民俗資料館 元・日向国分寺	推定 1796(寛政8)~97(寛政9)	丸い	不明	不明
④	毘沙門堂(山口県美祿郡秋芳町広谷)	1797(寛政9)8.12	頭巾をかぶる	笑う	なし
⑤	浜松市博物館 元・静岡県引佐郡引佐町奥山	1800(寛政12)4.28	丸い	笑う	なし
⑥	日本民藝館 元・山梨県西八代郡下部町 四国堂	1801(寛政13/享和1)2.24	丸い	笑う	なし
⑦	東京国立博物館	1804(享和4/文化1)3.29	丸い	笑う	あり(3本)
⑧	金毘羅堂(新潟県長岡市上前島) 元・長岡市上前島 青柳家	1804(享和4/文化1)8	丸い	不明	不明
⑨	宝生寺(新潟県長岡市白鳥町)	1804(享和4/文化1)8.16	丸い	笑う	あり(3本)
⑩	88歳の米寿版画 個人 新潟県柏崎市関町枇杷島で制作	1805(文化2)1.1	丸い (わずかな毛髪)	微笑	なし
⑪	大安寺(新潟県東頸城郡大島町)	1805(文化2)5.12	丸い (毛筋が見えるか)	笑う	あり(3本)
⑫	阿氏多尊者 清源寺(京都府船井郡八木町)	1806(文化3)12.20	丸い	笑う	なし
⑬	蔭涼寺(京都府船井郡八木町)	1807(文化4)1.8	丸い (毛筋が見えるか)	笑う	あり(4本)
⑭	福満寺(京都府船井郡丹波町) 元・龍泉寺(京都府船井郡丹波町)	1807(文化4)3.11	丸い	笑う	あり(4本)
⑮	毘沙門堂(兵庫県川辺郡猪名川町 上阿古谷)	1807(文化4)4.9	丸い	笑う	あり(4本)
⑯	東光寺(兵庫県川辺郡猪名川町)	1807(文化4)5.14	丸い	笑う	あり(4本)
⑰	天乳寺(兵庫県川辺郡猪名川町)	1807(文化4)5.18	丸い	笑う	あり(4本)

【実査または参照した図版等】

①柳宗悦『柳宗悦全集』第七巻(筑摩書房、1981)、②全国作品調査編『木喰仏のすべて』(誠文図書、1980)、③木喰スマイル会編『木喰』(鉾脈社、1996)、丸山尚一構成 別冊太陽『木喰の微笑仏』(平凡社、1983)、④木喰会編『木喰仏巡礼』(有峰書店新社、1984)、⑤~⑨⑪実査による、⑩⑬⑯⑰渋谷区松涛美術館図録『木喰の微笑仏』(朝日新聞社文化企画局大阪企画部、1997)、⑫⑭⑯松木弘吉編『木喰仏』(東方出版、2003)、⑮栗野頼之祐『北摂における木喰上人』(北摂郷土史学会、1967)、⑰小田急美術館展覧会図録『円空・木喰展』(朝日新聞社企画部、1973)、⑮⑰栗田美由紀「猪名川町の木喰仏-調査概報」(『文化財学報』17、奈良大学文学部文化財学科、1999)



同（背面）



大安寺像（正面）

# 写真1

## 一、木喰自刻像の再検討

木喰の自刻像は、先に述べた柳宗悦の木喰研究の頃から紹介されており、その後の研究者間でもしばしば取り上げられ解説がされてきた。最近、孤杉彩氏がそれらを整理し詳細にまとめた「木喰の自身像（前・後編）<sup>⑤</sup>」を発表された。孤杉氏は、木喰自刻像を全て取り上げ、自刻像に関する事柄について一点一点詳細にまとめている。また、木喰自刻像の背銘・図版を掲載する。

現在、それらの先行研究において木喰作の像のうち自刻像とされているものは、焼失のものを含め計一七点<sup>⑥</sup>ある（そのうち一点は版画、一点は阿氏多尊者と銘記がある像）。この一七点について像容の特徴を整理した（表1）。

木喰の彫る像が、自刻像であるという確証はその像の背銘に見ることができる。一例を上げると、大安寺（新潟県東頸城郡大島町大平）が所蔵する木喰作像（表1—⑪）の背面には次のような銘記がある（傍線は筆者）（写真1）

寿百万歳 日本千タイノ内なり 天下和順 作 自身蔵 日月清  
明文化二牛歳 五月十二日ニ 天一自在法門 木喰五行菩薩  
八十八才（花押）

このように「自身蔵」などと記される像については確実に自刻像と見ることができる。それらは表1に見る一七点のうち、⑤⑥⑦⑨⑪⑬⑭⑮⑯の一〇点である。従ってそれら一〇点以外の七点（①②

③④⑧⑩⑫) については自刻像であるかどうか再検討の余地があるといえる。

まず、背銘から自刻像であることが確実な一〇点について、像容の特徴等を整理すると次のようになる。

1 丸い頭部、

2 笑う表情、目と眉は上向き、口元両端をわずかにあげる、

3 額のしわは、確認が困難なものもあるが東京国立博物館像

(⑦) 以降に見られるのは年齢に応じて対応させたといえる、

4 大きく多量な顎髭、

5 大きな耳、

6 衣は通肩が多く、他に二点は偏袒右肩、

7 手を衣の中に入れ腹または胸前に置く(衣中手)、

8 持物は数珠か、または持物なし、

9 姿形は、坐像か倚像で倚像の場合は裸足である、

10 光背は宝生寺像(⑨)、を除く東京国立博物館像(⑦) 以降

の像に付せられ、前面外周には光明真言を記す。<sup>(7)</sup>

11 台座は特殊な六角形に斜線の文様を施したものが多くを占め、

その他山型が二点、岩座が一点、

そこで、背銘のない七点についても像容が右の特徴に合致するものは自刻像と見なすことができる。それは表1のうち①②⑧の三点である。

それでは残りの③④⑩⑫についてはどうかであろうか。

まず、③の西都市立歴史民俗資料館像は像の表面が削り取られているが、これは、昭和初期まで削り取って煎じて飲むと薬になると伝えられ、地元の人々によって削られてしまったからである。<sup>(8)</sup> この像は柳宗悦氏の調査時点で自刻像と記されているが、当時もこのように表面が削り取られていたらしく、背銘の判読不可のため当像を自刻像とした根拠は不明である。柳氏が著書に記すこの自刻像の特徴は

上人の自像、丈六尺二寸、恐らく彼の残した肖像のうち最も大なるものであろう。(中略) 毀損甚だしく顔面は只口と顎ひげとを残すのみである。右の片肌は僅かに法衣を纏い手を曲げて何ものかを支えている。左の手に束ねて肩より下に斜めに垂るものは大なる袋、大黒天像に見らるものと同じである。円き頭、豊成る耳。素足のまま私達に向かって直立する。

とある。<sup>(9)</sup> 柳氏が述べる特徴も参考にしながら当自刻像を確実な自刻像と比較してみると、丸い頭、表情は笑う、大きな耳、顎髭、衣は偏袒右肩、裸足、山型の台座、というような特徴は、一致している。しかし、立像、左手は大きな袋を持ち、右手は衣で覆い何か物を持つつという明確な自刻像にはない特徴が何点かあげられる。清源寺十三世仏海筆『十六羅漢由来記』<sup>(10)</sup> には木喰の背丈について「躬の長六尺なり」とあり、この像の総高が一八五センチメートルなので、等身大で彫られた自刻像である可能性も考えられなくはない。しかし、持物や像容の特徴から判断して当像については自刻像であるか判断

を保留にしておきたい。

次に④秋芳町毘沙門堂像は大正十二年に、当像が安置されていた堂と共に焼け、像の形は残るが炭化している。柳氏の調査時点で既に炭化した後であり、背銘は年代と他の文字少々のみが解読可能であった。当像も、自刻像であると村で言い伝えがある、ということを始めに柳氏が記したことから、<sup>(11)</sup>柳氏と柳氏以下の研究者も疑いなく自刻像としている。像容は、立像、頭部には頭巾をかぶり（そのため耳は隠れる）、表情は笑う、中くらいの大きさの顎鬚、手を衣の中に入れ胸前に置く、裸足、蓮華座である。明確な自刻像と異なる点は、頭に頭巾をかぶる、立像、台座が蓮華座という点である。当像が安置されているのは毘沙門堂という堂宇で、木喰作の毘沙門天と大黒天とともに置かれている。④はともに安置されている大黒天に顔の表情が非常に類似する。ここで注目したいのは、内田伸氏による次の記述である<sup>(12)</sup>

寛政九年（一七九七）から五〇年ばかり後の天保末年に書かれた長州藩の記録『風土注進案』には、秋吉（ママ）村の項に、この堂について、

毘沙門天 広谷村にあり

祭神 左殿 大国主命

中殿 経津主命

右殿 事代主命

神殿拝殿共梁行九尺九寸桁行壺丈五尺三寸

とある。これによると、経津主命とあるのが毘沙門天であり、自刻像といわれるものは、大国主命に対して事代主命（恵比須）としてまつっていたようである。

つまり、④は天保末年には「恵比須」とされていたのである。<sup>(13)</sup>したがって、④は自刻像である可能性が低いと思われる。

次に⑩の米寿版画は、紙面に自刻像である文字は見られないものの、署名の他日付が書かれ、「八木」という文字が彫られている。像容は、坐像、衣は偏袒右肩、手を衣に入れ腹（胸）前に置く、頭髪を少々表す、微笑を出そうとしているのか少々口元の両端が上がる、長い髭をたくわえる。以上の特徴が見られる。頭髪が少々見られるのは、他の自刻像の頭部に線刻で表した毛筋が確認できるものも存在する。⑩は版画であり、立体の像より毛髪を表現することが安易であるからであろう。木喰が有髪であったことは『十六羅漢由来記』に「髭髪雪の如く白し、乱毛螺の如く垂る」とあり、「竜泉寺の縁起」<sup>(14)</sup>には「白髪長鬚の老人」と記されていることから分かる。また、木喰七十九歳寛政八年（一七九六）頃作の和歌に、

法身の心のかみはそりもせずけさや衣のまへもはづかし<sup>(15)</sup>  
とあることが有髪であったことを示している。以上から、この版画は木喰自身の姿であり木喰八十八歳の自刻像<sup>(16)</sup>と判断できる。

最後に⑫の清源寺阿氏多尊者像は、背銘には「阿氏多尊者」とあり、柳氏の記録では、これを自刻像と記していない。孤杉氏も当像を自刻像の対象としていない。ただ五来重氏が、この像に関して



同（背面）



浜松市博物館像（正面）

## 写真2

「丹波諸畑清源寺では十六羅漢の阿氏多尊者の名で、自刻像を羅漢の一人にまつりあげてしまう。」「これはまぎれもなく木喰行道の自刻像であり（以下略）」と述べられ、以後当像については、木喰が自身を阿氏多尊者に置き換えた、羅漢になった、という解説が定説化している。<sup>(18)</sup>しかし、手印、額にしわを表現しない（<sup>(12)</sup>前後の像にはしわを施す）、靴を履くといった点が確実な自刻像とは異なる。像に自身を置き換えたことは理解できるが、他にも自刻像と類似する像は存在し、当像を自刻像としてしまうと、木喰の彫る多くの像が自刻像と成り得てしまう。従って当像は確実な自刻像ではないと判断したい。

以上の考察により、西都市立歴史民俗資料館像（<sup>(3)</sup>）は自刻像であるか判断し難く、秋芳町毘沙門堂像（<sup>(4)</sup>）は自刻像である可能性が低いとした。また、清源寺阿氏多尊者像（<sup>(12)</sup>）については他尊像であると見なし、これら三点は確実な自刻像から除外しておいた方がよいと考える。

### 二、背銘語句「蔵」の意味

次に木喰の背銘に記される特徴的な語句について検討を加えたい。木喰が背銘の中で自刻像であることを示すために用いた語句は次の通りである。<sup>(19)</sup>

「自身躰□（主）」（<sup>(5)</sup>・写真2）

「五行菩薩自身之蔵」（<sup>(6)</sup>）

「自身蔵」(7)(11)(14)

「自身□(之)蔵」(9)

「明満仙人自身蔵」(13)(15)

「明満仙人蔵」(16)

「明満仙人躰」(17)

ここで注目したいのは、「自身蔵」というように、像の字が当てはまる箇所全てに「蔵」を当てていることである。

この「蔵」は「像」の当て字であろうか。<sup>(20)</sup>「蔵」という字の他、「自身躰」というように「躰」の字も用いられていることから、「蔵」と「躰」は同等の意味で使用していると考えられる。

この「蔵」については、「如来蔵」の「蔵」とする見解もある。小島文保氏は「蔵」とは梵語の garbha (子宮) であり、くわしくいえば如来蔵 (tathagatagarbha) である。従って明満仙人自身蔵とは木喰自身に如来が宿していることを自覚した姿である<sup>(21)</sup>と述べる。更に孤杉氏は、小島氏の論に加え、仏教では「蔵」を「如来蔵」の意味に用いる場合がある、として、「如来蔵」の説明をしている。<sup>(22)</sup>

しかし筆者が注目したいのは、木喰の信仰である。木喰は真言宗の僧であり、特に木喰の信仰には弥陀の念仏と大日の阿字観を合わせた思想が窺える。例えば、自筆の『懺悔経諸鏡』<sup>(23)</sup>には次のように記される。

阿コノ一字ヨリシヤバ一切ノ事、ハジマリテ、キメウノシヤバセカイナリ、スナハチ光明遍照十方世カイナリ、ナヲ又、八

万四千ノ經々モ皆コノ一字ヨリ、イスルナリ

真言も南無阿弥陀仏もねんずれば人の知らざる供養なりけり

また、木喰が多く記した和歌にも次のように記される。

ありがたや あじ十方の中にすむ あじの衆生もなむあみだ佛<sup>(24)</sup>  
ありがたや あまねくてらす 五だひぐわん あじ十方はなむあみだ佛<sup>(25)</sup>

これは大日と弥陀が同体である、という覚鑒撰『五輪九字明秘密釈』<sup>(26)</sup>の思想に通じるのではないだろうか。この『五輪九字明秘密釈』に木喰の思想が通じることは既に宮坂宥勝氏が述べている。<sup>(27)</sup>

更に『五輪九字明秘密釈』の記述を見ていくと、

五大、五輪、六大法界、十界輪圓、一切衆生、色心實相、自身成仏の圖に云はく、

(図)

(中略) アバラカキャを以つて五輪世界を成ず。

とあるが、その内容は、木喰が九州国分寺にて五智如来を完成させ<sup>(28)</sup>た後に制作した「奉納大乘妙教納札」と呼ばれる五輪の塔型版木で、上部三段目までに「キャカラバア」と梵字を記すものに等しい。その思想から木喰の自刻像を改めて検討すると、自身蔵「蔵」の字の意味するものは、『五輪九字明秘密釈』に記される、

五大即ち五智なり。…五智即ち五輪なり。…色心不二なる

が故に、五大即ち五蔵、五蔵即ち五智なり。圖に云はく、

(梵字地) 肝の蔵は眼を主どる。



(梵字 水) 肺の蔵は鼻を主どる。

(梵字 火) 心の蔵は舌を主どる。

を元にしていと考えられよう。木喰の記す「蔵」は「肝の蔵」等の「蔵」を示し、「五智」＝「五輪」＝「五蔵」の「五蔵」つまり、臓器の臓の意味をなすと考えられる。

また、江戸時代には『諸家念仏集』巻六「真言念仏」<sup>(30)</sup>に「五行五大其名(中略)眼耳鼻舌身如次木水火土也即如次……五智也身中五蔵亦即五佛也謂肝心脾肺腎如次(以下略)」とあり、同様の思想を見ることができる。

さらに「蔵」の字が「臓」と同様の意味を持つことは『和漢三才図会』巻一<sup>(31)</sup>「経絡部」の五臓六腑の項に「臓は蔵なり」と見られる。

これらから判断すると木喰は蔵を「像」の当て字としたのではなく、元より肝臓、肺臓、心臓などの「臓」の意味で使用していたのではないだろうか。「蔵」が臓器を示すように「自身蔵」の他に背銘に記された「自身躰」という語句の「躰」について、それが自身の体を表していることも関連するといえよう。

## おわりに

以上、木喰の自刻像について再検討を行ってみた。多数現存する木喰の自刻像とされるものの中には背銘により自刻像であるという確証があるものもある。しかし、従来、木喰の自刻像とされてきた

もののいくつかには、確実に自刻像であるとはいえない難い像が含まれていることを指摘した。

また、背銘の特徴的な語句「自身蔵」の「蔵」の字について、それは、臓器の「臓」を示しているのではないかと考えた。つまり、背銘の語句「自身躰」の「躰」の字と共に、体に関する語句を使用しているのではないかということである。

今後の課題としては、木喰が自刻像を制作した動機や制作意識を考察し、さらには彫刻史における自刻像の位置づけをしていきたい。

自刻像を彫る、または伝承を含めた記録に残る自刻像は、僧でありながら彫刻をする者であると考えられる。江戸時代には、木喰と同様な活動を行った人物の存在があるため、他にも自刻像が存在するのではないだろうか。

## 注

(1) 柳宗悦『柳宗悦全集』第七巻(筑摩書房、一九八一)参照。

(2) 『四国堂心願鏡』(享和二年、木喰筆)には「日本順国八宗一見之行想拾大願之内本願として佛を佛師国々因縁有所にこれほどこすみな日本千躰の内なり」とある。

(3) 弾誓に関しては、宮島潤子「弾誓と徳本」『徳本行者全集』第六巻(山喜房仏書林、一九八〇)、珂碩上人に関しては、世

田谷区立郷土資料館編『浄真寺 文化財総合調査報告』（東京都世田谷区教育委員会、一九八六）参照。

- (4) 円空については、賓頭盧像として円空が造ったものを現代解釈でいつのまにか自刻像としてしまったという（小竹隆夫『円空』（造形社、一九七三））。

五百羅漢寺（東京目黒区）に安置される肖像彫刻について、高橋勉著・天恩山五百羅漢寺編『甦える羅漢たち』（東洋文化出版、一九八一）に「松雲禅師倚像・松雲作 松雲が自ら彫った像である。」と記す写真掲載がある。しかし筆者が当像について寺院に確認したところ、当寺院でも、長い間松雲元慶の自刻像であるとしてきたが、近年の解体修理により、自刻像でないことが判明したという。従って当記載は誤りである。

清水隆慶の自刻像は、田辺三郎助「南北朝から江戸時代の彫刻」（『文化財講座日本の美術』八、第一法規出版、一九七七、所収）に、「自身の位牌の其壇に納められた胸像で、高さ一センチ程、まさに肖像と、人形の二つの性格を兼ね備えたもの。」と説明があるが当像が自刻像であるかは不確かである。

白隠像（松蔭寺・静岡県沼津市原、安置）について伝自刻像として写真掲載がある（横田忠司「白隠と禅画」『全集日本の古寺』第四卷（集英社、一九八五）参照）。しかし、白隠が彫像を行ったという例を他に見ないため自刻像ではないであろう。

- (5) 『芸術学学報』（金沢芸術学研究会、一九九九／二〇〇一）

- (6) この他にもう一点、立木の銀杏を彫って龕を設け自刻像を入れたと伝わるものがあるが、現在では木が朽ち果て確認できない。（前掲注1、二八五頁）

- (7) 像に光背を表現し始めると、光背を付す像は光背正面外周に光明真言を墨書すると考えられる。

金毘羅堂像（⑧）、福満寺像（⑭）は表面が磨耗し確認が不可であるが、恐らく他の形態から光明真言が記されていたであろう。また、光背を付さない像の背銘で、孤杉氏前掲注5論文の「自身像銘記一覧」には、浜松市博物館像（⑤）（写真2）の頭部の位置に「光明真言の梵字か」と記す。実査を行ったところ、当像は表面の劣化により肉眼での確認は難しいが、浜松市博物館による赤外線カメラにて読み取った記録があり参考にさせていだいた。それによると特に頭部に文字は記されていない。また、もし、何らかの文字等が書かれていたとしても頭部の大きさからすると光明真言は記せないであろう。

- (8) 木喰スマイル会編『木喰—微笑仏にさそわれて』（鉾脈社、一九九六）

- (9) 前掲注1、二九一頁。

- (10) 木喰が京都の清源寺を訪れた文化三年（一八〇六）八十九歳時の記録。（前掲注1、五三九頁所収）。

- (11) 柳宗悦「長州に於ける上人の遺作」（前掲注1参照）

- (12) 内田伸『防長の微笑仏』(マツノ書店、一九七九)
- (13) しかし、実際に『風土注進案』(山口県文書館編『防長風土注進案』第一七卷(山口県立山口図書館、一九六二))を確認したところ、この記載事項がこの堂を指しているとは限らず定かではない。木喰が大黒天と恵比須を共に安置する例が他にあるため、この記載が当堂を指しているとすれば④の像が「恵比須」である可能性も考えられるが断定はできない。
- (14) 木喰九十歳時の記録。牧野正恭『九十才の微笑仏』(兵庫県民芸協会、一九八二)にはこれを「竜泉寺彫像縁起書」と記す。日向保編『木喰五行上人』(日向保、一九三五)に書き下し文を掲載する。
- (15) 『歌集』所収。表紙が青いたため「青表紙歌集」ともいう。寛政八年(一七九六)一月六日の日付がある。
- (16) ⑩は版画であるため自画像とも言えるが、自らが彫刻を施したことから自刻像とした。
- (17) 五来重『微笑仏 木喰の境涯』(淡交新社、一九六六)
- (18) 例を挙げると、梅原猛「木喰の思想」(丸山尚一構成 別冊太陽『木喰の微笑仏』所収、平凡社、一九八三)、猪名川町史編集専門委員会編『猪名川町史』二(猪名川町、一九八九)、矢島新「木喰の生涯とその時代」(『慈愛の造形木喰の微笑仏』所収、朝日新聞社文化企画局大阪企画部、一九九七)
- (19) 孤杉氏前掲論文注5「自身像銘記一覧」参照。
- (20) 「蔵」が自刻像のみに使用が認められるか、他尊像の背銘で尊名を表す語に「像」のかわりに「蔵」が使用されているか確認してみた。しかし、他尊像については、「薬師如来」「地藏菩薩」というように「○○像」の「像」の字までを記していない。そのため自刻像以外にも、この「蔵」の字を当てたかどうかは不明である。
- (21) 小島文保「木喰の書画―アミダ仏をめぐる―」(『竜谷大学仏教文化研究所紀要』一九集、竜谷大学仏教文化研究所、一九八〇)
- (22) 前掲論文注4。
- (23) 享和二年(一八〇二)二月二日筆。山梨県立図書館所蔵マイクロフィルム参照。原物は木喰の生家(直接の子孫ではない)である、山梨県西八代郡下都町・伊藤氏の管理にある。
- (24) 六字名号軸、享和三年(一八〇三)筆、長岡市上前島町・青柳氏所蔵。(『慈愛の造形木喰の微笑仏』、朝日新聞社文化企画局大阪企画部、一九九七、一五五頁参照。)
- (25) 『青表紙歌集』寛政八、十一年筆、前掲注1参照。
- (26) 『昭和新聞国訳大蔵経 宗典部』第二卷(名著普及会、一九七六)所収。
- (27) 宮坂宥勝「甲斐の木喰―八宗一見と阿字観―」(『智山学報』四八輯・通卷六二号、智山勧学会、一九九九)
- (28) 宮島潤子氏は、木喰が「五智如来」を制作したことに關して

『五輪九字明秘密釈』における覚鑊の思想を取り上げた後に、これは但唱における五智如来の五輪思想に直結する。さらに彈誓における木食行者の作仏思想的根源が、覚鑊にさかのぼり得る、とする視点は重要と思われる。と述べている。(宮島潤子「木食上人彈誓の生涯と思想」『信濃の聖と木食行者』、角川書店、一九八三)

- (29) 丸山尚一構成 別冊太陽『木喰の微笑仏』(平凡社、一九八三) 参照。版木裏には、「寛政六寅四月八日に成就／奉納大乘妙経作天一自在法門(花押)／日本順国 木喰 五行菩薩 年七十七歳」とある。

- (30) 寛政一二年、懷音編。(『浄土宗全書』一五、山喜房佛書林、一九七四) 参照。

- (31) 正徳三年、寺島良安著。(『日本庶民生活史料集成』二八、一九八四、三一書房) 参照。

(付記)

本稿を作成するにあたり、調査に際し、大安寺、浜松市博物館他、多くの方々に大変お世話になりました。厚く御礼申し上げます。